

現代会計の見方・考え方

第1回 衣装哲学と会計の本質

－「慣習」の力－

駒澤大学教授 石川純治

あの怪談で有名なラフカディオ・ハーン（小泉八雲）にカーライルの衣装哲学を論じた「衣装哲学の考え方」という論考がある。ここから「会計＝衣装」という会計の本質面をあぶり出そうとしたのが井尻雄士教授（カーネギーメロン大学）であり、その興味深い経緯は論考「会計責任の問題」に記されている（同志社大学会計学研究室編『会計学批判』所収、中央経済社、1975年）。

そこではハーンが言う衣装哲学の3つの中心点に触れているが、その第3の「真実をかくす衣装の役割」（マスク）という点が重要である。ただ、そこでは「マスクとしての会計」を必ずしも批判的な意味合いでとらえていない。とりわけ「ハーンがカーライルの衣装哲学を論じながら強調したかったのは、そういう虚偽たる慣習の重要性である。…つまり、慣習が実体に反映しないからといって、それを無視したり、軽ろんだりするのは誤りであるというのだ。ここに会計の本質がみられるのではないかと思う」（36頁）と「慣習」（コンベンション）の重要性を強調されている。

この点は、本誌掲載の「Shyam Sunder 教授に聞く」（平成23年4月18日号 No.3012）での **social norm**（慣習、慣行、習わし）の重要性にも通じる。すなわち、シャム・サンダー教授（イェール大学）は「ただ言えるのは、会計基準設定主体の独占を許すということは、少なくともこの **social norm** から離れていく方向にあることは間違いないと思います。…ルールも必要だけれども、ルールだけでは駄目だと。rule プラス **social norm** がなければならない」（50頁）と述べている。

ちなみに、この「慣習」の力という点は、意思決定者への情報提供という面では会計の本質を捉えられないという点に結びつく。論文のタイトルが「会計責任の問題」となっていることが、この点と密接にかかわっている。情報利用者中心観と会計プロセス中心観の相違ともいえる。換言すれば、会計の情報化と記録の空洞化であり、IFRS傾斜の現代的文脈における複式簿記の存在意義という論点ともかかわる。

ともかくも、ここでは井尻教授をして「いい言葉だなあ」と唸らせた次のハーンの言葉を引用しておこう（下線は石川）。5点にわたる社会と慣習との関係に留意したい。

But society is founded upon conventions, is regulated by conventions, is policed by conventions, is protected by conventions, is evolved by conventions.

さらに、ハーンの言う第2の点すなわち衣装によって社会的差別が作られるという点も重要だ。井尻教授は「衣装としての会計」が社会的差別の関係を促進させるという点に触

れているが、これは次回予定の「正当化に役立つ会計」という点にも通じる。もう 30 年以上も昔になるが筆者が大学院生のとき、日本の古典的会計理論（公表会計制度論）の代表的論者のひとり宮上一男教授が日本会計研究学会の記念公演（早稲田大学）で、やはり会計＝衣装の話がされたことを印象深く記憶している(補注)。

「会計＝衣装」という会計の本質観を探りながらも、両教授の見方と考え方には重なるところと重ならないところがあるという点で興味深い。その 1 つがここでの「慣習」の捉え方であろう。奇しくも、井尻「会計責任の問題」と宮上「会計現象の特質」の 2 つの論考は同一の著書に相前後して並んでいる。

(注) ちなみに、宮上理論の見方の特徴はといえば、端的には論考「会計現象の特質」（井尻論考と同書に所収）での 4 点、すなわち会計現象は、①個別企業ではなく社会現象、②制度的現象、③合理化・社会的承認、④文書的現象、という点に集約される。いずれも現代的文脈でみると、その視点には説明力があり、また現代性をもつといえる。ここに 1 つの「古典と現代」の視点がある。なお、④文書的現象は先の **social norm** が「文書化されない(unwritten)」という性格をもつことと対比すればいっそう理解されよう。

※本連載には、本稿の第 1 回にもみられるように、「古典と現代」という視点をときに織り交ぜてみたいと思っている。読者にあつては、現代的文脈におけるその視点の重要性に留意されたい。本連載が現代会計の見方・考え方にとって 1 つの素材になれば幸いである。